



おおとも・しゅん／1964年秋田市生まれ。東京外国語大学卒業後、東京のソフトウェアベンダーで仮名漢字変換システムの開発に従事。1995年秋田に戻り、事務系システム・OA機器システム・医療系システムの開発に携わる。2017年に退社し、2018年1月に古書・新刊書を扱う書店「乃帆書房」を秋田市大町に開業。

技術者と書店主の間には

大友 俊 (昭和58卒)

年の初めに秋田市内に書店を開業しました。新刊と古書を同列に扱い、新刊の方は、普通は注文しなければならないような本を中心とした品ぞろえになっているため、「マニアック」「よくまあ」という評価をいただくことがあります。

経歴についても「よくまあ」と言われます。昨年の秋まではIT技術者でした。そこから書店開業、というのは意外な経路に見えるようですが、聞かれるたびに「……と言われても」と首をひねっています。

乱暴に言ってしまうと、「私が本を読むIT技術者であった」ということになってしまうのですが、実は、IT技術者はかなり「本」を読みます。書店で売っている本か、別の技術者が作ったワープロ文書かの違いはあるにしても、多くの情報を頭に入れ、必要に応じて参照しながらシステムを組み上げていくため、「読むのが苦手」では仕事になりません。だからと言って、IT業界から書店を開業する人が多いわけではないので、「私が本を読む……」では答えにならないのですが。

システム開発の作業は「文筆業」だと思っています。会計処理を作るにしろ、画像処理を作るにしろ、一つの機能を実現するのに人それぞれの考え方があって表現方法も千差万別、第三者のチェックを受けて修正するのも同じ。プログラムをじっくり見ると作成者の哲学や人となりまで見えてきます。逆に、プログラムと普段の言動の差に驚くこともあります。これも、作家と作品の関係に似ています。

と、IT技術者と書店主の間には、飛び越えなければならないような溝はない、というところに戻ってきました。

当店の本の並び方も似ています。大まかなジャンル分けはありますが、その中には溝はない、という考えで細かく分けてはいません。そのため、「なんでこの本とこの本が同じ棚にあるの?」と感ぜられることもあるかもしれません。そういう予想外の出会いを楽しんでいただきたいと思っています。

秋田の酒造り

富岡 浩子 (平成17卒)

高校生のころ、友人たちと楽しく過ごした思い出とともに私の胸によみがえるのは、進路について大変悩んだ日々です。将来何をやりたいのか決められず、それでもとにかく秋田からは出たい、というような学生でした。高校3年生のときの恩師はそんな私の話を真剣に聞いてくださいました。その後、東京の大学に進み、様々な人々と出会い、はじめて外から秋田を見ました。たくさんの人に秋田を褒めてもらう機会があり、大変驚きました。息苦しさばかり感じていたふるさとの風景が、なんだか前よりもずっと美しく豊かに見えるようになりました。

就職活動をするころには、秋田に帰って仕事がしたいという気持ちが芽生えていました。就職活動をしていく中で、秋田の伝統産業である酒造りに興味を持ち、幸いにも現在働いている会社に入社することができました。私が働いている蔵には通年雇用の社員のほかに、普段は農家や大工さんで、冬だけ酒造りのために来てくれる季節蔵人の方々がいらっしゃいます。山内杜氏とよばれる秋田の伝統的な酒造り技術をもった方々です。私自身もその伝統技術を受け継ぎたいと思い日々学んでいます。

秋、季節蔵人がやってきて、蔵は賑やかになります。実ったお米を使って、冬の寒さの中ゆっくりと酒を醸します。厳しい寒さは体にこたえますが、おいしいお酒を造るために蔵人は毎日真摯に仕事をします。雪が溶け、あたたかい春が来ると蔵人は帰って行き、田に新しい苗を植えます。夏の間、蔵では次の酒造りの準備が行われます。そしてまた実りの秋がやってくるのです。

秋田の自然と四季の流れの中で酒造りは行われます。こうして造られる秋田のお酒を日本だけでなく世界の方々にも飲んでいただきたいと思っています。秋田のお酒を飲んだ方々に幸せな気持ちになっていただけるよう、おいしい酒造りに邁進していきたいと思っています。



とみおか・ひろこ／秋田市生まれ。日本女子大学理学部卒業後、清酒「高清水」醸造元の秋田酒類製造株式会社製造部に勤務。現在、同社仙人蔵副社氏。1級酒造技能士。2017年、山内杜氏試験に女性で初めて合格。